

## ◇あいちオレンジタウン構想の進展について

## 問1. 神戸

愛知県では、昨年末に「あいちオレンジタウン構想」第2期アクションプランを策定し、「認知症に理解の深いまちづくりの実現を目指して」との目標で、2023年度までの3か年で、認知症施策の更なる充実・強化を図ることとしています。その中のアクションプランでは7つの柱を設定し、先進的・重点的な取り組みを進めることとされています。その取り組み状況について、順次伺いたいと思います。

本県における認知症高齢者数は、2025年には最大で38.9万人になると見込まれており、誰もがなる可能性のある身近な病気だと思います。2025年には65歳以上の5人に1人という数字が見込まれており、自分にとっても他人ごとではないと感じております。

こうした中、アクション1の項目には、「いきいきと自分らしく暮らす姿を発信します！」とあり、認知症になっても自分の現状を受け止め、ご本人が自らの言葉で語り、認知症になっても希望を持って前を向いて暮らしていく姿を発信していくことが重要であるとあります。同じ状況にある人たちに、希望を与えることができるのは素晴らしいことだと思いますが、この1つ目の柱の「本人発信支援」の取り組み状況について、詳細を伺いたいと思います。

## 答1. (答弁者 地域包括ケア・認知症施策推進室長)

- 認知症の方が生き生きと活動されている姿は、認知症に関する社会の見方を変えるきっかけともなり、多くの認知症の方やご家族に希望を与えるものであるという観点から、国では2020年1月に5人の方を「希望大使」として委嘱し、認知症に関する普及啓発活動を開始しております。
- 同様に各都道府県に対しても地域版希望大使の創設が求められており、本県でも、認知症の方ご本人を「愛知県認知症希望大使」として委嘱し、認知症になっても希望をもって暮らしている姿を、自らの言葉で積極的に発信していただく取組を実施する予定としております。

- 現在、6月30日までを期限として、大使の募集中であり、7月末頃までに2名程度の大使を選考し、委嘱を行う予定としております。

## 問2. 神戸

認知症と診断されたご本人もご家族の方も不安になり、どのようにしたらよいのか戸惑われると思うので、経験者が積極的に発信されるのは心強いとも割れます。今、「認知症希望大使」を募集と伺いました場、就任をしていただいた後は、どのように活動していただくのでしょうか。どんな活動を想定してみえるのか伺います。

### 答2. (答弁者 地域包括ケア・認知症施策推進室長)

- 認知症希望大使にご就任いただいた後は、県民の皆様を対象とした啓発イベントである「認知症県民フォーラム」の場で、ご自身の体験や思い、将来の希望などを、語っていただく予定としております。
- 他にも、医療・介護人材の養成研修や、学校等への出前講座の場で、講師としてご活躍いただくことを想定しております。
- いずれにしても、大使に就任された方のご意向を踏まえた上で、ご体調に合わせ、ご活動いただく場を設定してまいりたいと考えております。

認知症の方ご本人からの発信を通して、広く認知症に対する理解を深め、ご本人やそのご家族などが希望を持って暮らし続けられるまちづくりを目指してまいります。

## 問3.

認知症の中でも、とりわけ若年性認知症の方は、離職により同世代のコミュニティとの関わりが希薄になるなど、居場所や社会参加の機会の確保が課題となっております。最近、日本でも海外でも映画などが制作され、関心が高まってきました。まだまだ活躍できる若い方が認知症になってしまうと、本人はもちろんのこと家族や周囲の方々も大変だと想像します。こうした若年性認知症の方の社会参加を支援するために、どのような取組を実施されているのか伺いたしたいと思います。

答3. (答弁者 地域包括ケア・認知症施策推進室長)

- 本県では、第2期アクションプランの柱の一つである「若年性認知症の人への支援」の取組として、今年度から新たに、就労やボランティア活動など若年性認知症の方の社会参加を支援するためのモデル事業に取り組んでおります。
- 具体的には、公募により、豊田市と長久手市に委託し、企業等を対象とした若年性認知症に関する研修会の開催や、ご本人や企業、医療・福祉関係者等の交流の場づくりなど、地域の実情に応じた取組みを最大3か年にわたり実施していただく予定です。
- こうした取組を通じまして、社会とのつながりが希薄になりがちな若年性認知症の方を、就労先や居場所となる適切な社会資源へとつなげる仕組みの構築を図り、若年性認知症の方の社会参加を促進してまいります。

問4. 神戸

やっとなワクチン接種が始まり、少しずつ新型コロナウイルスへの不安も減少していくと思いますが、このコロナ禍が長引いている中、まだまだ外出や人との交流が減ることにより、認知症の方の身体・認知機能の低下が懸念されています。特に認知症は、一人ぼっちで誰とも会話しないうような場合に症状の悪化が進むと言われます。そのために認知症の方やご家族の交流の場となっている「認知症カフェ」があると同いいましたが、このコロナ禍の中、運営も難しいと思います。このコロナ禍の中、どのように活動されているのか、またその活動の推進を図っていかれるのか伺いたいと思います。

答4. (答弁者 地域包括ケア・認知症施策推進室長)

- 昨年7月から8月にかけて「認知症介護研究・研修 仙台センター」が、全国の市町村に対し、コロナ禍におけるカフェの活動状況等について調査を実施されました。
- これによりますと、感染予防の観点から、カフェの開催自粛の要請を行っ

た自治体は6割以上にのぼり、委員ご指摘のとおり、外出や交流機会の減少によるご本人やご家族への影響が懸念されるところです。

- その一方で、オンラインの活用や電話等の代替手段を利用するなど、活動継続に向けた工夫を行っている事例も把握されております。
- こうした状況を踏まえまして、本県でも、今年度、市町村や認知症カフェの運営者を対象とした実態調査を実施することとしております。
- 感染症流行下における県内のカフェの現状や課題等を把握するとともに、調査において把握した新しい生活様式に対応した先進的な取組の事例や工夫等を取りまとめまして、広く発信し還元することで、認知症カフェの活動が継続され、ご本人やご家族の交流の推進が図られるよう、しっかりと支援してまいりたいと考えております。

#### 要望:神戸

最後に要望いたします。先ほども述べましたが、2025年には65歳以上の高齢者の約5人に1人、2040年には約4人に1人が認知症になると見込まれており、認知症施策の推進が喫緊の課題となっています。

昔は高齢者になると物忘れがひどくなり、「ボケたね。年だからしょうがないわ。」と本人も家族も笑っていました。私の曾祖母も長生きで90歳を超えた頃から、「ここは私の家じゃないから、帰るので送ってくれ」と毎日言っていました。叔父が車に乗せて近くを回って帰って来ると「ただいま」と帰って来る、そんな毎日でした。それも古き良き時代、大家族だったからこそ出来たのんびりした時代でした。

今はもっと長寿社会となりましたが、核家族化が進み、町内会や地域でのつながりも希薄化し、難しい世の中になりました。でもこれは他人ごとではなく、テーマにもあるように、「認知症に理解の深いまちづくり」に「じぶんごと」として取り組む社会を目指すを目標にしていかなければなりません。

第2アクションプランに基づく取組を着実に推進されることを要望して質問を終わります。